

「受賞の言葉」

佐藤 晴真

この度は齋藤秀雄メモリアル基金賞の受賞に与かり、大変光栄に思います。ソニー音楽財団の皆様はじめ選考委員の先生方、今まで師事した先生方、関係者の皆様に深く御礼申し上げます。指揮者、指導者であると同時に同じチェリストであった齋藤秀雄先生のお名前を冠したこの賞は、僕にとって近いようでとても遠い存在だと感じてきました。この度の受賞は身の引き締まる思いです。

上京して初めて師事した山崎伸子先生は齋藤秀雄先生のお弟子さんで、彼の厳しさ、そして愛の大きさをよくお話して下さいました。齋藤先生も僕と同じベルリンに留学していたとお聞きしていますが、私の通う学校のレッスン室の壁には彼が師事していたチェロ奏者 エマニュエル・フオイヤマンの写真が、畳のような大きさに飾られています。そのようなご縁もあり、今改めて顧みると、自分の大変に恵まれた環境を心から幸せに感じ、感謝の念は尽きません。

ベルリンで勉強していると、音楽だけでなく様々な角度から刺激を感じます。電車に乗って見る街並み、人の話し方や歩き方、月の明るさまでもが違うように感じます。もちろん今はベートーヴェンやブラームスが生きていた頃と全く違いますが、日本にはないヨーロッパ独特の時間の流れ方や人間味を感じることができます。ハッとさせられる瞬間は未だに多くあります。そうして感じてきたヨーロッパの空気感を、どう音楽に活かすことができるか日々模索しています。

昨今日常でクラシック音楽を耳にすることが益々多くなってきていますが、それと同時に特定の時代や有名な作品にのみフォーカスされている印象を受けます。もちろん名曲には名曲たらしめる理由があります。しかし音楽にはもっと色々な楽しみ方があると思います。流れていく先を想像してワクワクしたり、曲の組み立て方をパズルのように考えながら聴いたり、昔の自分の体験や感情と重ねたり。慣れ親しんだものだけでは、いずれ知りすぎてしまうでしょう。

普段耳にする機会がないだけで、“他にもこのようにいい音楽があるんですよ” と皆様に紹介し一緒に瞬間芸術を楽しんでいくこと、更には“佐藤だから” とそのような知らない曲でも楽しみに聴きにきていただけるような信頼される奏者になることが、僕の音楽家としての目標です。

そのために、まだまだ勉強することは尽きません。これからも興味と探究心をエネルギーに、常に音楽人生の高みを目指して進んでいきたいと思っています。

素晴らしいチェリストの皆様と今後のチェロ界、ひいては音楽界を更に発展させていけるよう、日々努力を重ねていきたいと思っています。

今後も皆様と音楽で繋がれることを、心より楽しみにしております。

「受賞の言葉」

鈴木 優人

この度は、名誉ある「齋藤秀雄メモリアル基金賞」の受賞者に選出して頂き、心から感謝申し上げます。

齋藤秀雄先生は私が生まれる七年前に他界されましたので、お目にかかることはできませんでしたが、世界的な名著である『指揮法教程』や講義録から指揮を学び、そして直接教えを受けた方々から多くのお話を伺いました。厳しくも愛情深い教育精神をお持ちだったからこそ、この賞がいまあるのだと思います。身が引き締まるとともに、何か先生の門に入れて頂けたような嬉しい気持ちです。

さて齋藤先生が生きた時代から半世紀近く経ちました。音楽をとりまく環境はその間に急速に変化し、いまやインターネットのストリーミングであらゆる音源が手軽に聴けるようになりました。さらに音楽を聴きながら、自分の聴いたものに音楽アプリで星をつけて評価できるようにまでなりました。SNSでも新聞記事や手紙とは比較にならない速さで多くの人のレビューが飛んできます。既存の出版物はほぼすべてオンラインで手に入りますし、楽譜自体もデジタル化の動きが進んでいます。

そしてこの目まぐるしい変化とは裏腹に、音楽を作る、あるいは演奏する人たちの、真に手作りで行われる音楽的な創造過程そのものはまったく変わっていないようにも思えます。指揮者とオーケストラがひとつの演奏会を準備するときのあの研ぎ澄まされた時間や、作曲家が夜なべしてメロディを絞り出すあの苦しい時間は、今も昔も変わっていないのではないのでしょうか。ある新聞記事に、今後AIに置き換えられてゆく職業ランキングというのがあり、音楽家や作曲家は最下位近くにランクインしていました。まだ多くの人々は（幸い）音楽にAIではなく人間を求めているようです。

しかしながら、指揮者という存在が今後も不変であり続けるのか、それは誰にもわかりません。現にバッハの時代における指揮者の役割はまったく違うものでした。数十年後に振り返ったときが楽しみです。

それこそバロック時代ならばいざ知らず、現代において作曲や演奏もする指揮者というのは少々変わった存在だと思います。この権威ある賞によって大きな後押しを頂きました。より一層研鑽を積み、よい仕事をしていきたいと思います。末筆ながら小澤征爾マエストロ、堤剛先生、選考委員の皆様、運営にあたられている公益財団法人ソニー音楽財団のみなさまに深く御礼申し上げ、受賞のことばとさせていただきます。

第 18 回 齋藤秀雄メモリアル基金賞

チェロ部門 受賞者プロフィール



佐藤 晴真 (チェロ)

Haruma SATO, Cello

現在、その将来が最も期待される弱冠 21 歳の新進気鋭のチェロ奏者。

2019 年、長い伝統と権威を誇るミュンヘン国際音楽コンクール チェロ部門において日本人として初めて優勝して、一躍国際的に注目を集めた。18 年には、ルトスワフスキ国際チェロ・コンクールにおいて第 1 位および特別賞を受賞している。

1998 年名古屋市出身。第 11 回泉の森ジュニア チェロ・コンクール中学生部門金賞、第 67 回全日本学生音楽コンクール チェロ部門高校の部第 1 位および日本放送協会賞、第 83 回日本音楽コンクール チェロ部門第 1 位および徳永賞・黒柳賞、第 13 回ドメニコ・ガブリエリ・チェロコンクール第 1 位、第 1 回アリオン桐朋音楽賞など、多数の受賞歴を誇る。

すでに国内外のオーケストラと共演を重ねており、室内楽公演などにも出演して好評を博している。また、NHK テレビ、NHK-FM にも出演している。18 年 8 月には、ワルシャワにて「ショパンと彼のヨーロッパ国際音楽祭」に出演。

これまでに、林良一、山崎伸子、中木健二の各氏に師事。現在は、ベルリン芸術大学にて J=P. マインツ氏に師事している。

13 年度東京都北区民文化奨励賞。16 年度東京藝術大学宗次特待奨学生。2018 年度ロームミュージックファンデーション奨学生。ベルリン在住。

使用楽器は宗次コレクションより貸与された E. ロッカ 1903 年。弓は匿名のコレクターより貸与された F. Tourte。

第 18 回 齋藤秀雄メモリアル基金賞

指揮者部門 受賞者プロフィール



鈴木 優人

(指揮者, 作曲, ピアノ, オルガン, チェンバロ)

Masato SUZUKI

Conductor, Composer, Piano, Organ, harpsichord

1981年オランダ生まれ。東京藝術大学及び同大学院修了。オランダ・ハーグ王立音楽院修了。第18回ホテルオークラ音楽賞受賞。

2018年9月よりバッハ・コレギウム・ジャパン首席指揮者に就任。2020年4月1日からは、読売日本交響楽団の指揮者/クリエイティブ・パートナーに就任予定。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開する。指揮者としてアンサンブル金沢、NHK交響楽団、九州交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー管弦楽団、広島交響楽団、読売日本交響楽団等と共演。2017年11月には、モンテヴェルディ生誕450周年を記念し、歌劇「ポッペアの戴冠」を国際的で魅力に富む歌手陣で上演。高い芸術性と優れたキャストイングを生かした躍動感を伴った上演はバロック・オペラの新機軸として高い評価を得た。

作曲家としても数々の委嘱を受けると同時に、J.S. バッハBWV190 喪失楽章の復元や(Carus)、モーツァルト『レクイエム』の補筆・校訂が(Schott Music)、高い評価を得ている。

NHK-FMの「古楽の楽しみ」に解説者としてレギュラー出演。チェンバロ・ソロのCD「rencontre」は各紙で絶賛されている。2019年8月、ハルモニア・ムンディよりヴィオラのアントワン・タメスティとの新譜「J.S. バッハ: ヴィオラ [・ダ・ガンバ] とチェンバロのためのソナタ集」をリリース。2020年秋には同デュオの日本ツアーを予定。

調布国際音楽祭エグゼクティブ・プロデューサー、舞台演出、企画プロデュース、作曲とその活動に垣根はなく各方面から大きな期待が寄せられている。